

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02579

研究課題名（和文）保育者の長期的な就業継続の要因とワーク・エンゲージメント形成プロセスに関する研究

研究課題名（英文）Process of Forming Work Engagement for Kindergarten Teachers

研究代表者

香曾我部 琢（KOSOKABE, TAKU）

宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・教授

研究者番号：00398497

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：保育者のワークエンゲージメント形成の要因とプロセスについて、インタビューによる質的分析と、順序関係分析やNIRSによる前頭部脳血流量の変化についての量的分析の2つの知見によって実証した。具体的には、質的分析では、保育者のワークエンゲージメント形成の要因として、A子どもの成長を見取った経験、B自分がしたい保育を実現できた経験、C自分の仕事に見合った給与や就労環境の整備が示された。ワークエンゲージメント尺度による順序関係分析では、熱意・活力・没頭の3因子ごとにその順序性と、因子間では熱意・活力・没頭と順序性があることを実証した。NIRSでは、幼児理解に経験年数によって差があることを実証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として、はじめに、保育者のワークエンゲージメント形成の要因を明らかにしたことがあげられる。次に、ワークエンゲージメント尺度（UWS）を順序関係分析を用いて、その項目間の順序関係を明らかにしたことがあげられる。さらに、NIRSによって、ワークエンゲージメントの要因として示された「幼児の成長を見取った経験」が、熟達群と初任群で差があることを実証した点があげられる。社会的意義としては、これらの知見によって、保育者のワークエンゲージメントを高めるための具体的な施策や体制づくりに援用することによって保育者の離職を抑制し、保育士不足の問題を解決することが可能となることがあげられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to identify the factors and processes that contribute to the formation of work engagement among child care providers. The study used a qualitative analysis based on interviews, an ordinal relationship analysis method, and a quantitative analysis based on NIRS. Specifically, the qualitative analysis identified three factors that contribute to the formation of work engagement among child caregivers: A: the experience of witnessing the growth of children, B: the experience of being able to achieve the kind of childcare they want to do, and C: the salary and working environment that is commensurate with their work. The ordinal relationship analysis method using the work engagement scale revealed the ordinality of each of the three factors: enthusiasm, vitality, and immersion. NIRS demonstrated that there is a difference in infant understanding depending on the years of experience.

研究分野：保育学

キーワード：ワークエンゲージメント 保育士不足 離職 幼児理解 就労条件 複線径路・等至性アプローチ 順序関係分析

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

保育領域では、2000 年ごろから離職の要因に関する研究が積み重ねられてきたが、保育者が就業継続する要因に関する研究はほとんど見られない。しかし、離職予防には、数年で離職した保育者の意識だけでなく、長期的に就業を継続している保育者の意識を明らかにすることが重要となる。実際に、日本においても保育士の高い離職率を下げるために、質の高い保育を提供するための人材供給という視点で、キャリアパスの整備や経験に応じた処遇改善など、長期的なキャリアの在り方を改善する施策の必要性が示されている。

廣川(2008)も、離職するという短期的な経験ばかりが取り上げられ、「なぜ勤務を継続して頑張ることができるのか」という長期的な視点で保育者が就業を継続する経験に着目することの重要性を指摘している。しかしながら、いまだに保育者の就業継続の要因を対象とした研究は少ない。また、少ない研究においても、対象者の 8 割が経験 7 年未満保育者で、10 年以上の長期的な視点で就業継続の要因を捉えた先行研究はほとんど見られない。

経験7年以下の保育者のデータではあるものの、就業継続の要因として阪木(2018)は、子どもの成長を実感することや保護者・同僚との良好な関係、西坂(2014)は勤務園の職場環境の良さや充実感、川俣(2018)は労働条件、人間関係、やりがいを示している。つまり、保育者の長期的な就業継続が、(ア)保育実践の質の高さ、(イ)他者との関係性の良好さ、(ウ)仕事に対するやりがいなどのポジティブな感情と関連することが想定される。

### 2. 研究の目的

本研究では、離職が少なく、長期的に就業を継続する保育者が多い園に着目し、その園の保育実践の質も把握した上で、保育者たちがどのような関係性を築いてきたのか、そのかわりの経験や出来事を包括的に捉え、そしてそこで生起する感情を明らかにする。とくに、仕事に対する活力や情熱などのポジティブな感情であるワーク・エンゲージメントに焦点を当て、その形成プロセスを巨視的・縦断的な視点で明らかにする。そして、その知見をもとにリーダーシップと同僚性を育む研修プログラムを開発することを目指す。

### 3. 研究の方法

保育領域では、2000 年ごろから離職の要因に関する研究が積み重ねられてきたが、保育者が就業継続する要因に関する研究はほとんど見られない。しかし、離職予防には、数年で離職した保育者の意識だけでなく、長期的に就業を継続している保育者の意識を明らかにすることが重要となる。それによって、保育者のキャリアの在り方を長期的に捉え、長期にわたって就業を継続させる施策について知見を得られると考える。

香曾我部(2013)は、20 年以上の経験を持つ保育者が同僚と実践コミュニティを形成することによって困難を乗り越え、その経験を転機として意味づけることで保育者として成長し続けてきたことを明らかにした。つまり、園に勤務する保育者たちの関係性の在り方を明らかにすることで、保育者の長期にわたる継続的な就業の要因を明らかにすることができると考えられるのである。就業継続の要因に関する数少ない先行研究では、そのすべてで保育者一人ひとりの就業継続の意識のみを研究対象としており、その共通点や差異を比較する研究だけである。一つの園の保育者全員の関係性の在り方を包括的に捉え、その関係性の変容を縦断的に追った研究はまだない。

阪木(2018)は、就業継続する要因として「子どもの成長を実感する」ことを示した。そこで、本研究では、子どもの成長が保障されるような質の高い保育が、保育者の就業へのやりがいや活力、情熱を生むと考え、保育の質を評価する尺度として保育環境評価スケール(ECERS-R)と「ユトレヒト・ワーク・エンゲージメント尺度」(Schaufeli & Bakker, 2003)などのWE尺度を用い、保育の質(保育環境)と保育者のポジティブな感情との関連について因子分析などの量的研究で明らかにする。保育の質と保育者のポジティブな感情との関連性について明らかにしようとする量的研究はまだ見られない。

そこで、本研究では、以下の3つの研究方法を用いて、量的・質的な分析を行うとともに、それらの知見をハイブリッドさせてメタ推論を行った。

(A)はじめに、先行研究をレビューした結果をもとに質問項目を作成し、さらにそれらの質問項目を使って保育者へ半構造化インタビューを行い、その言語データをもとにワーク・エンゲージメント形成の要因について明らかにする。

(B)次に、そこで要因の一つとして示された「幼児の成長を見取る経験」について明らかにする。具体的には、写真を刺激素材として用いて幼児の心身の発達への理解をどのように行うか、保育経験年数10年以上の熟達群と初任群に分けてインタビューを行った。この実験では、自分の園の幼児と他の園の幼児の写真2枚を3回に分けて実施し、写真をみて幼児理解をしている間、NIRSを用いて前頭野の血流動態を測定した。

(C)おわりに、「コトレヒト・ワーク・エンゲージメント尺度」を保育者に質問紙調査として実施し、そのデータを順序関係分析法(SSRA)を用いて分析を行った。

#### 4. 研究成果

##### (A)インタビュー調査の結果と考察

先行研究をもとに、保育者への質問項目を構成した。

これまで、保育をしているときに活力がみなぎるように感じたときはありますか？

自分の仕事が、社会においてどのような意義があると思っていますか？

このまま、保育者として働きつづけたいと考えていますか？

自分の仕事に誇りを感じますか？

保育をしていて時間が経つのがはやいと思ったことはありますか？

休みのときに保育のことを思い出すことはありますか？

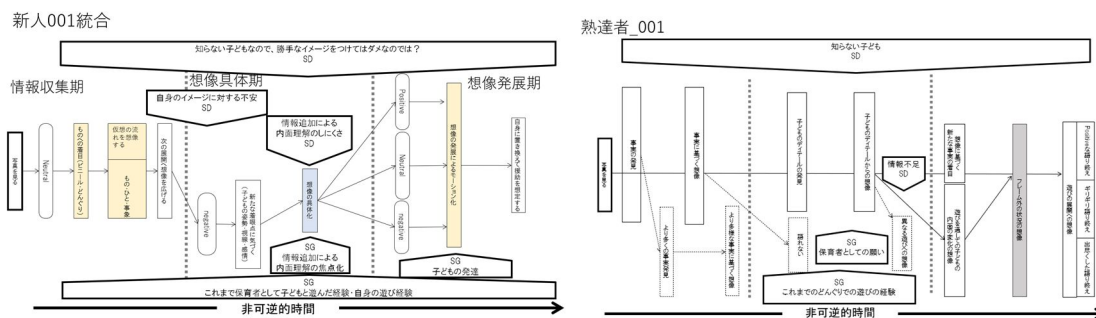
この質問項目に沿って、インタビューを実施した結果、保育者に共通したワーク・エンゲージメント形成の3つの要因が共通する経験として示された。

- a)子どもの成長を見取った経験
- b)自分がしたい保育を実現できた経験
- c)自分の仕事に見合った給与や就労環境の整備

##### (B)NIRSを用いたインタビュー調査の結果と考察

###### (1)インタビューデータのTEAによる分析結果

インタビューの分析結果については、3回のインタビューの内容の質的な違いに着目しつつ、1回ごとにどのように語りを変容していくプロセスを保育者1人ひとりTEM図を作成し、さらに3人分を統合した。



初任者の他園の子どもへのコメントをもとに下記の3つの期に時期区分を行った。始めに、初任保育者は、写真から読み取れる視覚情報よりナチュラルな状態で、モノに着目している。それぞれ、ビニール袋・どんぐり・ボールに視点を持ち、読み取った場面から遊びの流れを想像し始めた。モノを中心に視覚情報を捉えながらも、どんぐりが転がる様子といった事象や、A児の興味へと仮想が移っていった。最初のこの時期を「情報収集期」とした。

次に、「SD自身のイメージに対する不安」により3名とも感情がNegativeに動いた。その後「新たな着眼点に気づく」ことで「想像の具体化」に繋がり、「SD情報追加による内面理解のしにくさ」や「SG情報追加による内面理解の焦点化」によって「想像の具体化」を分岐点として内面理解に対する3人の先生の感情が様々動いた。そこでこの期を「想像具体期」とした。

さらに、具体化した想像に「SGこれまで保育者として子どもと遊んだ経験・自身の遊び経験」が働き想像が発展していく。しかし「SG子どもの発達」の理解も影響し、別々な想像として発展していく様子が明らかとなった。このことで、静止画で捉えていた想像に動きが加えられ、遊びをモーション化して捉えている様子も伺えた。また、想像の中で

自身に置き換えることで、援助まで想定している様子も見られた。よって、この期を「想像発展期」とした。

熟達者の知らない他園の幼児の写真へのコメントは、第 1 に、写真内の大まかな出来事に注目し、その事実に基づく想像が行われる「俯瞰期」、第 2 に、写真内の子どものディティールに着目し、そのディティールからの彼のやろうとしている遊びへの想像が行われる「子ども焦点化期」、第 3 に、写真に映っていない他者の存在を想像し、遊びの展開への想像が行われる「フレーム外想像期」に分けられる。「フレーム外想像期」に関して、写真に映っていない他者の存在が想像されたのは、この熟達・知らない子ども写真群においてのみであった。

そして、写真に映っていない他者の存在が想像されたのちに遊びの展開への想像へ至っていた。こうした想像が行われた背景の説明が 2 点考えられる。その時点で把握している写真からの情報を基にした想像が枯渇することで、新たな情報収集が模索される「情報不足説」。この説を補強する情報として、とりわけ A 先生の場合、知らない子どもの写真に対する語りに一貫してネガティブであった一方で、自園の幼児に関してはポジティブであった。複数の子どもの遊ぶ時の方が、遊びが発展しやすいという経験と、遊びが発展してほしいという願いの両方にそって想像が膨らんだとする「経験・願い説」。この説を補強する情報として、C 先生は想像中の遊びの発展の中で、保育者と子どもの「共感」を挙げている。また、B 先生は、想像内の保育者と子どもとの関わりを自身の「期待」と述べている。

## (2) 考察

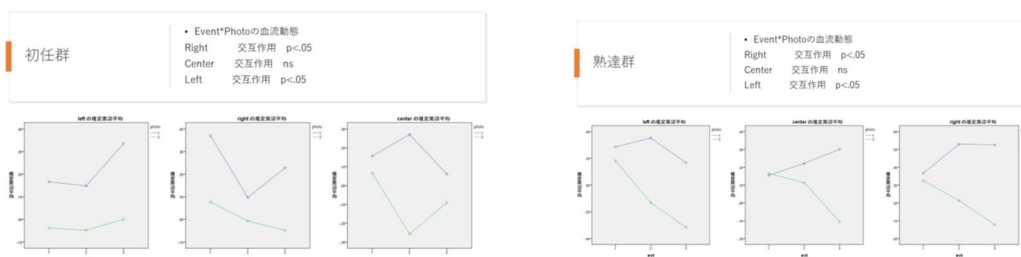
他園の幼児の心情理解については、熟達保育者が 1 回目から俯瞰的ではあるものの事実に基づき子どもの内面理解が進められていたのに対して、初任保育者は 2 回目になって内面理解が行われていること。さらに、初任保育者が、写真に写っている子どもの姿や背景などの情報内にとどまっているのに対して、熟達保育者は写真には写っていない他者(保育者や保護者)の存在を指摘して、その他者との共感など、相互作用の効果についても言及している点に差異が見られた。

一方で、熟達・初任いずれにおいても「知らない子ども」について語ることへの遠慮や不安感について述べており、子どもについて語ることに對して、一度は Negative な感情を生起させていることが共通して現れることが示された。

## (3) NIRS の分析結果

初任群の保育者は、他園児の状況把握を行っている 1 回目ではメタ認知的思考を行っていることが実証された。次に、写真をもとにその説明をしている 2 回目は快情動を予測している。一方で、初任群の保育者は、自園児に対しては、1 回目から 2 回目になると幼児の心情を推測すると快情動を予測する血流が急激に下降させている、

3 回目になると、写真から得られた情報が出尽くしてしまったため、写真のその後の幼児の展開や遊びの発展についてあくまでも想定・想像として語っている。そのため、不快情動を制御している。



熟達群の保育者は、写真から得られた情報を話しをしている 1 回目と 2 回目は不快情動が高いが、想像を働かせる 3 回目では低くなり、2 回目と 3 回目も快情動の予測を維持している。1 3 回目に向かってメタ認知的な判断や未来予測を次第に高めて、自らの想定について語っていることが示された。

さらに、熟達群の保育者は自園児について、1 回目から 2 回目、3 回目と前頭部分の血流動態が低下していることが示された。その要因として、1 回目で過去の幼児のデータを思い出し、そのデータを整理しながら語っているため、情動の起伏が起きにくかったと考えられる

経験年数(2) × 自園・他園(2)の二要因分散分析の結果、右・左側部については、熟達群の血流量が有意に高いことが示された。中央部分のメタ認知的な思考や未来予測については初任群と熟達者には有意な差が無い。写



真を見て、自らの情動を生起させることが熟達化と関連することが示唆された。さらに、他園児でも情動を生起させている点が熟達と関連することが示された。

#### (4) ジョイントディスプレイによるメタ推論

他園と自園の違い >> 他園の幼児の写真の方が、写真から情報を得る過程で、快・不快ともに情動を高くなることが明らかにされた。自園の幼児については、既知の情報を整理して、その幼児理解を背景も含めて話しているために前頭部分の血流は次第に落ち着いていく。

保育者の経験年数の違い >> 1回目から3回目にかけて事実から想像へと幼児理解の内容を変容させていく点は同じだが、不快情動を高める初任群に対して、快情動を高めて維持している点に違いがある。熟達群でも、初任群でも、他園児の方が血流が高く、自園児は低い。唯一、自園児については熟達群は血流量が低く、初任群の方が高い。自分の園の幼児への子ども理解を語る際に、熟達群が情動を生起させず、情報を整理して安心して語っていることが示されている。

#### (C) ユトレヒト・ワーク・エンゲージメント尺度(Utrecht Work Engagement Scale:UWS)の順序関係分析(SRA)

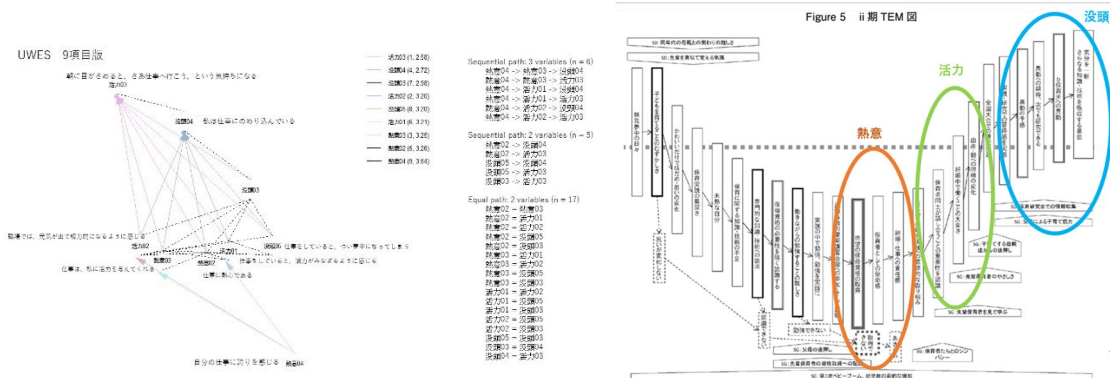
##### (1) 結果

SRA の結果から、以下の4つの樹状図を得ることができた。これらの図から、UWES の「活力因子、熱意因子、没頭因子」以上3つの因子における5～6項目の内いくつかに順序関係があることが明らかにされた。

まず、活力因子では、保育者が仕事への「活力がみなぎる」感覚を抱くと同時に、「精力的になる」経験をへて、朝起きてすぐに仕事に「行こう」という気持ちが生じることが示された。

次に、熱意因子では、初めの段階で保育者という仕事への「誇り」を抱き、次に、仕事への「活力」、そして同時に「意義や価値」を感じ取り、最終的に仕事への「意欲がかきたえられる」ことが示された。

最後に、没頭因子では、初めに仕事をしていると「時間がたつのが早い」という感覚を得て、その後、「夢中」になり、同時に「幸せ」を感じて、最終的に保育という仕事に「のめり込む」ことが示唆された。



##### (2) 統合

SRA の分析結果から、保育者という仕事への没頭が、「時間がたつのが早い」「夢中」「幸せ」「のめり込む」という順序関係が示され、熱意 活力 没頭という順序関係が存在することが示された。さらに、TEM の分析結果においても、新たな保育実践を構想していく中で、夢中になって、試行錯誤を積み重ねる経験が存在することが明らかにされた。また、結果 B において、自らが構想した新しい保育実践の意義や価値について、他の保育者との関わりにおいて、その思いを伝え、同意を得ることによって、さらに意欲的に自らが構想した「新しい保育実践」を展開していく過程で保育者効力感を高める姿が示された。結果 A の熱意因子においても、「活力」を得ると同時に「意義や価値」を感じとり、さらなる「意欲」へとつながることが示された。

##### (3) メタ推論

保育者効力感が高まる過程の中で、ワーク・エンゲージメントの没頭因子と熱意因子が高まっていくことが示され、その相関性が存在することが示された。とくに、自らが構想した新しい保育実践を実現していく過程において、同僚の保育者や研修会で知り合った保育者など、他者との相互作用を量的にも、質的にも増大させていく中で、保育という仕事への熱意と没頭を高めていくことが明らかにされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 目黒勇樹、田宮希紗、香曾我部琢	4. 巻 19
2. 論文標題 2歳児に保育者はどのように語りかけるのか：保育者が捉える2歳児の言語発達に関する事例研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宮城教育大学家庭科教育研究	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永井久美子、香曾我部琢、渡辺俊太郎	4. 巻 61(1)
2. 論文標題 園長が乳児保育担当者を選定する基準とプロセス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 81-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.60.1_81	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 駒久美子、香曾我部琢、味府美香、長尾智絵	4. 巻 28
2. 論文標題 他者の幼児理解と自らの幼児理解を共有することの意義 - 幼児の自由な楽器遊び場面を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 幼児教育学研究	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 香曾我部琢
2. 発表標題 保育者が子どもを理解するプロセス—TEAとNIRSの混合研究法
3. 学会等名 TEAと質的探究学会第1回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 永井久美子、香曾我部琢、渡辺俊太郎
2. 発表標題 乳児クラスを担当する保育士の保育行為スタイル
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝口 圭子、野澤 祥子、淀川 裕美、小崎 恭弘、香曾我部 琢、松井 剛太、渡邊 由恵
2. 発表標題 0歳児クラスにおける保育の質の探索的検討 / 保育の環境と保育者のかかわりから
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中田 範子、石倉 卓子、香曾我部 琢、竹田 好美
2. 発表標題 園庭評価指標を活用した園内研修の試み
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝口圭子、野澤祥子、淀川裕美、小崎恭弘、香曾我部琢、松井剛太、渡邊由恵
2. 発表標題 0歳児クラスにおける保育の質の探索的検討
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中田範子、香曾我部琢、石倉卓子、竹田好子
2. 発表標題 園庭評価指標を活用した園内研修の試み
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 永井久美子、渡辺俊太郎、香曾我部琢
2. 発表標題 園長は乳児保育担当者をどのようにして決めるか？乳児保育担当者に求められる専門性を探る
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 香曾我部琢
2. 発表標題 保育カンファレンスにおける保育者の感情
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 香曾我部琢
2. 発表標題 保育者効力感の形成プロセス - SRAとTEMによる混合研究法の試み -
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 香曾我部琢
2. 発表標題 保育者のコミュニティ意識の形成プロセス - TEAとSRAによる混合研究法 -
3. 学会等名 日本コミュニティ心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 香曾我部琢
2. 発表標題 あなたは「自分の子どもを自分の勤める園で育てたい!」と思えるか
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 香曾我部琢
2. 発表標題 保育者が自らの職務に満足するプロセス - TEAとSRAによる混合研究法の提案 -
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 安田裕子、サトウタツヤ、香曾我部琢	4. 発行年 2022年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 254
3. 書名 TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述：保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究	

1. 著者名 サトウタツヤ、安田裕子、上川多恵子、宮下太陽、伊東美智子、小澤伊久美、香曾我部琢	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 112
3. 書名 カタログTEA 図で響きあう	

1. 著者名 安田裕子、サトウタツヤ、香曾我部琢	4. 発行年 2022年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 254
3. 書名 TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述：保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究	

1. 著者名 上田敏丈・香曾我部琢	4. 発行年 2021年
2. 出版社 建帛社	5. 総ページ数 144
3. 書名 子ども理解 - エピソードから考える理論と援助	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------